臨床報告

甘草瀉心湯が奏効した睡眠時遊行症
(夢遊病) の一症例

元山 幹雄

A Case of Sleepwalking Disorder Treated with Kanzo-shashin-to

Mikio MOTOYAMA

M. D., YOKOSUKA Plant Clinic, Victor Co. of Japan, 58-4 Shinmei-cho, Yokosuka-shi, Kanagawa 239, Japan

Abstract The effectiveness of Kanzoshashin-to on sleepwalking disorder is reported here. The patient was a 60-year-old male, who worked as a company employee. His main complaint was shouting, jumping out of bed and running around the room when he was in an unconscious sleep state. There was no notable related family history. He had had surgery for a herniated lumbar disk in 1971. His present condition began in about 1984, but no measures were taken at that time. In 1989, he underwent various tests at a local clinic and at the psychiatric department of a general hospital, but no definitive diagnosis was given. He received tranquilizers, which temporarily lessened the condition, but the effects were not lasting. The symptoms were still present at the time of a reexamination at his company clinic on February 2nd, 1994. Kampo abdominal diagnosis revealed the abdominal signs 'shinkahiko' and 'Kyokyokuman,' or fullness and resistance in the upper abdomen and hypochondrium. Kanzoshashin-to was given on February 16th. One week after commencement of administration, the symptoms gradually improved, and he stopped shouting, running around and throwing things in a sleep state.

Key words: Kanzoshashin-to, sleepwalking disorder

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 46, 761-764, 1996
(accepted 27 Sep, 1995)

緒言

甘草瀉心湯は半夏瀉心湯に甘草を増量したものであり、半夏瀉心湯の証で急迫症状を呈するものに有効であるといわれている。一般には激しい下痢や口内炎に用いられることが多いが、中神琴溪¹⁾は生々堂治験で睡眠時遊行症と思われる症例

に甘草瀉心湯が有効であったことを報告している。最近、同様の症例で甘草瀉心湯を用い奏功した例を経験したので報告する。

症例

症例： 60歳 男性 会社員

主訴：夜寝ている時に大声で怒鳴る、無意識

医、日本ビクター株式会社、横須賀工場診療所、神奈川、〒239 横須賀市神明町58-4
[1995年9月27日受理]

に起きて部屋の中を歩き(走り)回り、近くにある物を放り投げる。

家族歴：特記すべきことなし。家族構成は妻、娘の3人である。

既往歴：昭和46年8月 腰椎椎間板ヘルニア手術施行。

現病歴：昭和59年頃から主訴がみられたが特に病院には受診せずに放置していた。平成元年の夏、症状が酷かったので近医を受診、diazepamを投与されたがあまり効かなかった。9月、総合病院の精神科を受診。頭部CTでは異常所見は認めず、脳波では睡眠時にsharp waveが数回見られたが主訴がでんかん発作による症状とも考え難いということで、診断ははっきりせず経過を見ることになった。diazepamを投与され、その時は一時的に症状は軽くなったが長くは続かず数回の投薬で中断している。[]、成人病健診でコレステロール、および胃X-P異常が見られたため再検査の呼び出しで会社診療所を受診した。上記症状は続いて見られていた。症状をさらに詳しく尋ねると、夜、寝てから2時間位して大声で怒鳴る。怒鳴る内容は会社のことが多く、30分程続きその後は眠る。また、無意識に起きて部屋の中を歩き(走り)回り、近くにある物を放り投げる。妻に止められ、気がつく。発作時、妻の話に受け答えするが、後で覚えていないとのことであった。夜、怒鳴るのは毎日であり、歩き回ったり、物を投げつけるのは週に1、2回であった。

現 症：顔貌、表情には特に異常は認めず。体格は良好。脈は72/分、平。血圧は136/86。舌は湿潤し、苔は見られず。腹部所見では心下部に軽度の圧痛を認め、軽い心下痞硬、胸脇苦満を認めたが振水音や悸は認めなかった。

検査成績：血液一般検査では異常所見はなく、血液生化学検査ではHDLコレステロールの値はやや低めであるが、他には特に異常所見は認めず。検尿でも異常なく。胸部X-P異常なし、心電図正常範囲。内視鏡検査では胃体部分粘膜の発赤が見られ、胃炎の所見を認めた。

治療経過：診療所と職場が離れておりなかなか

診療時間に来れず電話での診療が多くなった。

[] (電話) 良い漢方薬があるから暫く服薬してみるようにと話し、甘草瀉心湯の方意でツムラ半夏瀉心湯エキス 7.5g とウチダ甘草エキス 1.5g を併用し分3で投与した。

[] (電話) 服薬1週間位で徐々に効果が現れ、夜、大声で怒鳴ること、歩き回り物を投げつけることはなくなったとのこと。

[] 診療所を受診。経過は良く、以前は睡眠不足で朝、目の周りにクマが出来るが多かったが、最近は良く眠れるとのこと。腹診所見は軽度の胸脇苦満は見られたが初診時に認めた心下部の圧痛や痞硬は見られなかった。

以後、続服。[] に30日分の薬を送ったのが最後でその後の連絡は途絶えた。10月に入り電話で様子を聞くと、内服は中止したが経過は良く、時々、ブツブツ寝言をいう位であり落ち着いている。前に投与された薬(diazepam)では一時的に症状が軽くなることもあったが長続きはしなかった。今度の薬は良く効いたとのことであった。

考 察

本症例について松田邦夫先生に話したところ、睡眠時遊行症と推定され甘草瀉心湯証の可能性を示唆された²⁾。睡眠時遊行症については中神琴溪の生々堂治驗に記載がある。即ち、近江大津の人の婚約している一人娘に変わった病気があり、毎夜のこと辰巳の時刻になって、家人が熟睡すると、こっそり起き上がって舞を舞う、その舞は精妙閑雅で、才妓の最も秀でた者が舞うのに似ている。その舞は寅の刻の終る頃になるとやみ、それから床につく、その舞をのぞいてみると、毎晩、その曲が違って、曲が異なるたびに、その奇妙なこと、まことに名状し難い。ところで翌朝の動作、飲食はちっとも平常とは変わらず、また自分でもそのことを知らない。先生はこれを診て狐惑病と診断し甘草瀉心湯を与えたところ、数日もたたないのに夜間の舞踏はやみ、某家に嫁いで子供が生まれたとのことであった。

甘草瀉心湯についての原典は傷寒論と金匱要略

にある。傷寒論³⁾の記載には「傷寒中風、医返って之を下し、その人下利、日に数十行、穀化せず、腹中雷鳴、心下痞硬して満、乾嘔、心煩、安きを得ず、医、心下痞を見て、病つきずと謂い、復之を下し、その痞ますます甚だし、甘草瀉心湯之を主る。」とあり、その目標は心下痞硬、腹中雷鳴、激しい下痢があり、下痢がない時でも心煩して気分不穏を覚えるものを治すとされている。金匱要略⁴⁾の記載は「狐惑の病たる、状、傷寒の如く、黙々として眠らんと欲し、目閉ずるを得ず、臥起安からず、喉を触するを惑となし、陰を触するを狐と為す。飲食を欲せず、食臭を聞くを惡み、其の面目乍ち赤く、乍ち黒く、乍ち白し。上部を触すれば即ち声渴す。」とあり、これにより本方を睡眠時遊行症や不眠に用いるとされている。また類聚方広義⁵⁾では吉益東洞の方極の文を引いて「半夏瀉心湯證にして心煩し安きを得ざる者を治す。」と述べ、尾臺榕堂の頭注では「この方、半夏瀉心湯方内に更に甘草一兩を加う。しかれども其の主治する所、大いに同じからず。曰く、下利、日に数十行、穀化せず、曰く、乾嘔、心煩、安きを得ず、曰く、黙々として眠らんと欲して目閉ずるを得ず、臥起安からざる者、此れ皆、急迫する所有りて然る者なり。甘草、君薬たる所以なり。」といっている。甘草瀉心湯は半夏瀉心湯に甘草を増量したものでありエキス剤では甘草瀉心湯エキスはないのでツムラ半夏瀉心湯エキス 7.5g とウチダ甘草エキス 1.5g を併用し投与した。

本症例は総合病院で脳波検査を行い、睡眠時に sharp wave が数回見られたが主訴がてんかん発作による症状とも考え難いということで診断ははっきりしなかった。てんかんの一病型である複雑部分発作では、意識障害に続き口をもぐもぐさせる、歩き回るなどの自動症が見られることがあり、てんかん発作も否定はできないが、日中には全く発作が見られないことから可能性は低いと思われる。

睡眠時遊行症はノンレム睡眠の比較的深い第3、4段階に起こり、睡眠中に起き上がり、無意識に行動し、再び就床するが翌朝になってそれを

覚えていないものであり、身体の運動機能は覚醒していて意識の方が覚醒していない、覚醒障害とも考えられている。また、夜、大声で怒鳴ることも毎日見られたが、これは睡眠時遊行症と共に発現しやすく、ノンレム睡眠の深い時期に見られる夜驚、あるいはノンレム睡眠の比較的浅い時期に見られることが多い寝言の何れかと思われる。

これら睡眠時遊行症や夜驚、寝言は小児によく見られ、感情の不安定さが基にあると考えられている。診察時における会話では明らかな精神障害や知的障害は感じなかったが、妻の話では性格的に非常に几帳面であり、またささいなことに固執することがあるとのことであり、粘着性傾向が窺えた。本症例の仕事は営業部門の庶務職であり、掃除などの雑用も多く、性格傾向と合わせて、心因による感情の不安定さも大きかったと思われ、60歳という年齢にもかかわらず本症が見られたものとする。

本症例は生々堂治験の例のように舞を舞うように閑雅ではないが、就寝してから起き上がり無意識に行動することは同じである。腹証では軽度の心下痞硬を認めた。また、夜、大声で怒鳴るのは会社のことが多く、意識下での心煩が夜間の急迫症状を現したと思われ、これらより甘草瀉心湯の適証であり、奏功したものと考えられた。

平成7年6月、その後の様子を電話で尋ねたところ、最近では就寝中に時々、大きな声を出すこともあるが以前とは全然違うとの答えであった。

結 語

甘草瀉心湯が奏功した睡眠時遊行症の症例を経験した。中神琴溪の例を追試しえたと思われ興味あり、ここに報告する。

本論文を御校閲下さいました松田邦夫先生に深謝いたします。なお本症例は平成7年6月11日、第46回日本東洋医学会総会で発表した。

文 献

- 1) 中神琴溪：生々堂治験 卷之上、近世漢方医学書集成、17、374-375、名著出版、1979
- 2) 大塚敬節：症例による漢方治療の実際、31-32、

南山堂, 1963

- 3) 大塚敬節: 臨床応用傷寒論解説, 328-330, 創元社, 1966

4) 大塚敬節: 金匱要略講話, 83-85, 創元社, 1979

- 5) 尾臺榕堂: 類聚方広義, 136-137, 日本漢方医学研究所, 1993

要旨 中神琴溪の睡眠時遊行症の治驗に倣い甘草瀉心湯を投与し奏功した症例を経験した。症例は60歳, 男性, 会社員。主訴は, 夜, 寝ている時に大声で怒鳴る, 無意識に起きて部屋の中を歩き(走り)回る。家族歴は特記すべきことなく, 既往歴は昭和46年, 腰椎椎間板ヘルニア手術施行。現病歴は昭和59年頃から主訴が見られたが放置していた。平成元年, 近医, 及び総合病院の精神科を受診, 諸検査を行ったが診断ははっきりしなかった。安定剤の投薬を受け, 主訴は一時的には軽くなったが長くは続かなかった。[REDACTED], 成人病健診の再検査のため会社診療所を受診, 症状は続いてみられていた。現症は腹診で軽度の心下痞硬, 胸脇苦満を認めた。治療経過は [REDACTED], 甘草瀉心湯を投与。服薬後, 1週間位で徐々に効果が現れ, 夜, 大声で怒鳴ること, 歩き回り物を投げつけることはなくなった。

キーワード: 甘草瀉心湯, 睡眠時遊行症